

家畜についてみれば、初期のうちはやはり兎、鶏、山羊という小中家畜が
多かったが、厩肥の獲得、畜力利用の見地から27年に始まった中期家畜
資金の導入によって和牛が除々に増加した。32年、バス道路が完成すると、
牛乳搬出が容易になり、そのため乳牛が増加しはじめ、反面、和牛の減少が
みられる。山羊は初期のうちから毛糸自給用として飼育されている。採草林
地、原野に恵まれ、一方、飼料を購入する経済的余裕もないことから、飼
料は殆んど自給している状態である。

現金収入は主として①馬鈴薯②大豆③タバコ④大小麦⑤大根によってもた
られ、その他、鶏卵、仔畜等の畜産物からも得られる。しかし、これらは
農業粗収入、年間20~30万という低さからもわかるように、きわめて僅か
なものである。そのため、営農資金を始め各種融資金が家計費に繰り入れら
れることが多い。

現在では政府資金は返済期に入っており、中金、県信連の少額のしかも短
中期の資金しか得られず、年々償還金の額がふえてゆくことは非常な問題で
ある。開拓者は長期資金の十分な融資を望んでいるのである。

以上に述べた作付作物、家畜の動向、収入源となる養畜産物などの点から、
川辺開拓地は旧農村と近代的農村の中間的な性格を占めるものと考えられる。
このような性格は商売経済の高度な発展の中に於てなされた開拓であること、
しかしながら、その地理的位置に恵まれていなかったこと等に基因するもの
であろうと思う。

明治前期那須野原の開墾

一那須開墾社の成立と解体

北 中 昌 子

栃木県那須郡那須扇状地の扇頂部から扇尖部へかけての地域＝那須野原は
従来充分開墾されず、一万余町歩の広大な荒野であった。その荒野も、明治
十年代から二十年代へかけて、地元農民や困窮士族によって、或は当時の政
府高官によって、あますところなく分割され、開墾に着手されたのである。

この論文は、その当時開墾に着手された中でも、最大の三千四百町歩を採
掘して、地元豪農を中心とする農民によって成立した、那須開墾社の成立か
ら解体の移行過程を中心に考察したものである。如何なる時代的変化が開墾

を可能にしたのか？当時の社会的背景の下では、那須野原のような非常にわるい自然的条件と適合して、どういう開墾の方法がとられたのか？那須野原全体の開墾の中で那須開墾社はどういう位置を占めるか？那須開墾社の経営の分析を中心とした成立から解体への変化、その後の各農場の発展の方向等をその内容とするものである。

×

×

地租が国家財政の基礎をなし、農産物が輸出入の王座を占めていた明治前期にあつて、勸農政策は非常に重要視されていた。口富開墾、窮乏士族救済のため、全国いたるところの荒蕪地には開墾の奨励がなされ、この那須野原に於ても、県令、地元豪農によって、明治九年には開墾のための収蔵が行われた。この当時、おくれた日本社会を急激に資本主義化せんとする殖産興業政策の中で、農業も又、例外ではなかつた。欧米の新式農具の輸入普及、育種場設置、外国種苗の輸入、家畜肥料の輸入等が、無批判的の旨目的に行われている時、政府高官松方正義の提言を直接の契機として、先の「収蔵」は発展して、一つの大農式農場が成立した。これが明治十三年に出た那須開墾社である。那須、塩谷両郡の県会議員を中心とした農民の小資本を集めて株金組織によって出たのである。

一方、中央に於ては、明治九年大久保利通が東北各地に国营開墾適地を調査の際、那須野原も大きくクローズ・アップされた。国营事業としては、福島県の対面原に行われることになったのである。それ以後、那須開墾社と時を同じくして、政府高官が那須の土地獲得にのり出し、後にはほとんど全部を彼らが所有するにいたる。これは全目的のみて日本内地に於ては、特殊な位置を占めるものである。

那須開墾社は、外米農産物の導入、大農具の払下げを受け馬耕による大農式直営開墾、耕作、県営牧場より払下げをうけての牧畜、植林を行わんとしたものであるが、それは結局のところ、失敗した。農業内部に於て、資本主義的生産関係・技術・市場・労働力が再生産される条件もなく、内的発展の契機もめはえていない旧態依然たる明治前期に於ては、最初から、直営農場崩壊の必然性をもつていた。自然的悪条件の下で最も生産に力をと、いだのがきわめて収獲の不安定な陸稲であつたため、農業そのものさえ成立しえないような状態であり、牧畜も「肥料ニ充ル爲牛馬ヲ牧シ」たにすぎず、植林も防風林として以上の積極的意義を持たなかつた。加うるに十四年以來のデフレの進行に伴い、十八年の流水開墾までには、経営赤字、直営の失敗が明らかになつた。社は当初の農民的性格を失ひ、株はほとんどが中央の華族官吏政商等へわたり、他の華族農場一般と性格を一にするものとなつた。二十年の

土地私下完了と共に直営を廃止し、各株主に株数に応じて土地の分割を行う。こゝにいたって会社としての積極的存在意義を失い二十六年解社するにいたる。

最後に、この株主原簿過程に成立した那須華族農場（那須用壘社も転化したものとして）のその一般的性格にふれ結びとした。

最後に、芬々までに全体の構成を示すと次の通りである。

1. 序論—那須野原の素描
2. 那須用壘社の成立過程。
 - (1) 那須野原用壘の社会的背景と那須用壘社の成立。
 - (2) 那須華族農場の成立。
3. 那須用壘社の展開過程
— 大農式至営から小作制への移行
 - (1) 那須用壘社の構成
 - (2) 大農式至営
 - (3) 直営の崩壊—解体へ
 - (4) 那須用壘社解散後の株主の動向
4. 那須華族農場の—般的性格

—終りに—

近郊農業の都市化への対応

—千葉県市川市の場合—

野 田 和 子

- 目 次
- はじめに
- 市川市の農業
- 現在の農業の概況
 - 都市的発展と農業
- 対象地域の分布
- 島畑経営をする市川新田
 - 台地上の畑作による堀内
 - 両部落の農業至営にみられる都市化への対応
- 農業の地域差による都市化の異り—東京面郊との比較
- 東京の勵振